

土佐中學校創立基本資料集解説

人材育成への思いが結集

資料集の構成と川崎・宇田・三根

本書に収録した「土佐中學校創立基本資料集」（以下、「資料集」と表記）は次の四点からなり、複製に当たっては母校の所蔵図書を原本とした。また、川崎家・宇田家はじめ母校など関係者のうち、連絡先の確認ができた方々には向陽プレスクラブからご相談し、ご承諾をいただいた。文中の人名は故人・現存者とも敬称を省略、卒業生は初出にのみ卒業回を付記した。

1. 「土佐中學校の設立」（『宇田友四郎翁』昭和一四年九月三〇日 宇田翁伝記刊行会編・発行より）
2. 「幾三郎翁と秀才教育土佐中學校」（『川崎幾三郎翁伝』昭和一七年一二月五日 川崎幾三郎翁伝刊行会編・発行より）
3. 「三根圓次郎先生略伝」（『三根先生追悼誌』昭和一八年六月三〇日 土佐中學校同窓会編・発行より）

4. 『土佐中學校要覽』昭和五年一月（昭和五年一月八日 土佐中學校発行より）（以上の四冊は、本文では宇田伝・川崎伝・三根伝・要覽と表記させていただく。）

土佐中の創立者は川崎幾三郎・宇田友四郎の二人であり、大正九年に許可の出た財団法人の名称は、「川崎宇田財団法人」であった。まずここでは、初代校長・三根圓次郎を含め、伝記の刊行順に三人の略歴を紹介する。

宇田友四郎

万延元年（一八六〇）高知県香美郡岸本町（現・香我美町）で商家の次男として生まれ、日本郵船高知支店などいくつかの職歴を経て土佐運輸会社を設立、土佐商船へと発展させ、大いに経営手腕を発揮、土佐電気鉄道・土佐電気・土佐セメント・白洋汽船の社長、土佐銀行頭取も務めた。なかでも大正二年設立の白洋汽船は、翌年の第一次世界大戦開戦によるヨーロッパ各国の船舶不足で「黄金景気」を迎えたが、終戦・講和にいたると景気の反動を予測、大正九年には株主に一五割の配当で出資に応えるとともに、いっきに事業を縮小、戦後恐慌による損害を免れた。こうして宇田は、自らの才覚で大正末年には数百万の巨富を得ていた。昭和一三年（一九三八）没、享年七九歳。伝記刊行は翌年である。

川崎幾三郎

安政二年（一八五五）高知県土佐郡八百屋町（現・高知市）で土佐藩専売品取扱商人の次男として生

まれ、家業を手伝いつつ夜は楠本塾・藤田塾で学ぶ。一八歳で金物店主となり、青年実業家としての活動を開始する。各種物産を販売する総合商社から、電灯会社・土佐電気鉄道・水力発電所・土佐セメント・下田石灰・大東漁業など様々な事業の創設を手がけ、土佐銀行頭取・商工会議所頭取を二〇年にわたって務めた。時代の要請に応じて、また土佐の立地や物産を生かして、近代産業を着実に興していった大実業家であった。宇田と協力した事業も多いが、反面では実業家としてよきライバルでもあったと思われる。大正一〇年（一九二一）没、享年六七歳。伝記刊行は、二一年後の昭和一七年である。

三根圓次郎

明治六年（一八七三）長崎県彼杵郡瀬戸町檜浦郷で旧大村藩大庄屋の家に生まれる。私立大村中学校、

熊本第五高等学校を経て、明治三〇年に東京帝国大学文科大学（文学部）哲学科を卒業、県立山形中学教諭となる。福岡県立東筑中学を経て、明治三四年には早くも佐賀県立第三中学校長となる。時に二九歳であった。以来、県立の佐賀中学・徳島中学・山形中学・新潟中学の校長を歴任、大正九年土佐中初代校長に迎えられる。昭和一〇年現職のまま病没、享年六三歳。大正時代に刊行された『大日本現代教育家銘鑑』には、徳島中学校長時代の三根を全国有数の教育者の一人として紹介してある。「年齒（年齢）わずかに三十有余歳、風貌すこぶるあがらざるものあり、ここにおいてか職員・学生やや軽侮の色を以てこれを迎う。氏あえてこれを意とせず。それ諄々教えて倦まず。懇々導いて怠らざ

るや。衆、その人非凡偉傑なるを知り、その学識の高遠なるに驚き……」。早くから中等教育界で注目された逸材であった。昭和一八年刊『三根先生追悼誌』に、「三根圓次郎先生略傳」が掲載された。なお、中野実（元東京大学史史料室）は、明治時代の文科大学卒業生に期待された主要任務は、各県の最高学府であった中学校に赴任し、自らも研究しつつ国家有為の人材を育成することだったと述べてくれた。

伝記の筆者は、宇田伝が宮地竹峯、川崎伝が五百蔵無声ほか、三根伝が井上清である。前二者の経歴は未詳だが、井上は母校の六回生で東京帝国大学文学部国史学科卒、執筆当時は文部省で維新史研究に当たっていた。戦後は、マルクス史学からの近代日本史研究で知られ、京都大学人文科学研究所教授を務めた。平成一三年、京都で逝去。享年八七歳。

高知市長の発案と三根の招聘

両翁の伝記にあるように、土佐中設立の発案者は当時の高知市長・藤崎朋之であった。大正八年に市長がなぜ私立中学設立をよびかけたのか。開校記念碑には「維新の際、薩長土と併称せられて土佐より人材多く輩出したりしは、……爾来（以来）教育振るわず人材ようやく凋落せんとす」と簡潔に述べてあるが、さらに当時の社会経済的な背景も見落とすことができない。

第一次世界大戦の経済好況のなかで貧富の差が拡大、特に米価高騰によって明日の米代に事欠く困窮者が生まれ、大正八年には富山県の漁村で米騒動が発生、全国に波及していった。高知市内でも、富豪や米屋が襲われるとの噂が広まり、警察にとどまらず軍隊まで出動して厳戒態勢をとった。『高知県の百年』（山川出版社）には、「高知で任侠の人として有名であった鬼頭良之助（森田良吉）は財閥の宇田友四郎の出した資金で米を集め、（鬼頭米）の名のもとに廉売したのであった。また富豪の川崎幾三郎も宇田とともに白米百石・金四千円を抛出し、市民施米として白米二〇石を特別に寄付した」とある。当時の高知の富豪と云えば宇田・川崎を指すことが衆目の一致するところで、両者はその輿望に応えて対応してきたのだ。

このような世情に危機意識を持った藤崎市長は、両翁が日頃から教育への見識が高く、人材育成に務めていた点に着目し、さらなる社会事業への貢献として、私立中学設立を持ちかけたのである。その際に相談にあずかったのが、市助役・川島正件（後に市長・土佐中理事）、市視学・西山庸平、市会議員・池本浩静であった。西山は明治末から大正にかけての新教育の先駆者で、夜須小学校での自発主義の実践や、欧米の教育書を読破しての「生活としての学習」論が全国的に高く評価されていた。

三者による英才教育のための特殊中学設立構想は市長の承認を得て、両翁との交渉は司法・官界の大物・北川信從^{のぶより}にゆだねることとなった。北川は安芸郡北川村出身で、大正五年に新潟知事に就任したが翌年退官、東京市で悠々自適の

生活であった。旧知の北川の斡旋で、両翁も三〇万円ずつの出資を了承、次は校長の人選となった。

三根校長選任の経緯は、宇田伝の「四 校長の人選」にあるように、北川が新潟県知事時代に三根の人物・識見・手腕を熟知していたからである。そのきっかけは、大正七年の新潟高校（旧制）新設に関連した新潟中学の同盟休校事件と思われる。『新潟高校一〇〇年史』には、同盟休校の背景として「強まる（高校）受験体制への不満、英才教育をかかげる三根校長への反発」があったが、根拠薄弱で三根校長に陳謝、中心生徒二名退学、二名無期停学で落着いたとある。続けて、「実は退学生徒の転学先について、何日もかけて県内各地の中学を回り、熱心に奔走したのは三根校長自身だった」と、処分した生徒救済のため密かに行動した温情を紹介してある。さらに北川が、当時の東京府立一中（現都立日比谷高校）校長・川田正激（高知市出身）に相談、やはり三根を推薦されたことは、三根伝にある。

北川は大正一二年には病気で帰高、翌年逝去。享年六五歳。昭和三年、三根が発行人となって追悼誌『北川信従』が刊行される。その中で三根は、こう述べている。「土佐中学創立の際、余に向かつていう様、へ土佐は不思議にも古来天才奇才を出すこと少なくないと思う。それで教育のしようによつては先人に劣らぬ偉人を輩出せしめることが出来ると思うから、シッカリやつてもらいたいとの希望であった。この一言は余をして責任の大なるを痛感せしめたのである。」

大正デモクラシーと川田・三根

大正八年一月二日の『土陽新聞』には「土佐中学創立目論見」の記事があり、「予科として小学五・六年級を添付し七学級を置く」「一学年二十五人を限度とし優秀者を集め無資力者は之を給費す」「学校全体を家庭的とし寄宿舎を設け、なるべく全生徒を寄宿せしめ生徒をして田園生活に興味を起こさし務む」「職員以下小使にいたるまで、すべて優秀教育に興味を有するものを選抜起用」とある。予科の併設、少数精鋭、給費制度、寄宿舎での田園生活、職員全員の優秀教育への意識確認まで、土佐中の輪郭が明確に示されている。

三根校長は土佐中の教育方針を策定しつつ、大正九年三月四日には川田正激の紹介で東京市本郷曙町の自宅で病氣静養中の寺田寅彦（東京帝国大学教授）をたずね、学校用地に江の口にあった寺田家の土地購入を依頼している。残念ながらすでに先約があり、成立しなかったと寺田の日記にある。寺田は、熊本の五高・東京帝国大学で三根の少し後輩にあたり、三根は高知の教育事情なども聞いたのであろう。後に、土佐中には寺田から柱時計が寄贈されている。校舎は、結局土佐郡潮江村（現高知市塩屋崎町）になり、敷地五二七七坪を購入した。まさに田んぼに囲まれた田園であった。

（川崎伝二八六頁）

ここで、北川とも三根とも昵懇で土佐中設立の助言をしてきた川田正激を、簡単に紹介しておこう。文久三年（一八六三）土佐郡尾立村（現高知市尾立）で生まれ、東京に出て苦学しつつ英語を学び、第三高等学校英語科教員などを経

て明治四二年東京府立第一中学校長となる。大正二年から一年二ヶ月にわたり欧米の中等教育制度視察に派遣され、イギリスのイトトン・スクールに感激して帰国する。『日比谷高校一〇〇年史』には「川田の教育観と大正デモクラシー」の見出しで、もともと教育に対しリベラルな考えであったが、欧米視察から帰国後、「学校は生徒の主体性を尊重し、その人格を認め、……生徒を信用することを教育の出発点とするという教育観を確立」とある。「生徒の自主性と創造力を重んずる教育」とも述べ、吉野作造の「民本主義」「大正デモクラシー」にもとづく新教育運動ともつながり、教師や父母に受け入れられたとする。

この川田校長と手を携えて大正時代の中学教育界をリードしたのが、大正元年に三九歳で県立山形中学の校長に着任した三根であった。同中学を継承した『山形東高等学校百年史』は、「三根校長の教育方針は質実剛健の気風の中に自由闊達を精神を生徒に教えた」とある。三根は大正五年には有志全国中学校長会の会長として「中学教育上戦後特に注意すべき事項」十項目をまとめ、『共同会雑誌』に発表している。最初に「愛国心の涵養、国民的精神を振作」をおいてあるが、これは明治二三年に発布された「教育勅語」や、当時の「中学校令」に則ったものである。二項目からは、「自主独立の精神」「海外発展の気運」「体育を奨励」「科学的研究心を鼓吹」「自学自習の気風」「自治の精神」など、川田・三根が提唱・実践したりベラルな教育観が並んでおり、今日でも色あせない。

川崎・宇田両翁のすこいのは、巨額の寄付をしながら、人材育成の中学創立という目的に合意、北川が選んだ三根に

面談、その人物を信頼して学校設立・運営の一切をまかせ、教育内容には口を出さなかったことである。三根は、出資者からの豊富な資金と全幅の信頼を得て、理想の学園建設に取り組むことが可能となった。なお、寄付金は当初は両翁三〇万円ずつ合計六〇万円であり、五〇万円は今後利息を学校運営にあてる基金、一〇万円が土地購入・校舎建設・設備費など開校資金の予定であった。然し、実際には六〇万円がそっくり基金として預金され、開校経費二五万円が別途寄付された。合計八五万円は、今日の金額では六〇〜八〇億円に達するのではないだろうか。

こうして土佐中は理想的な出資者と教育者を得て、大正九年四月に帯屋町の仮校舎で開校、二年後には潮江の新校舎が落成する。だが、昭和に入ると金融恐慌などもあって政治・経済とも混迷を深め、大正デモクラシーに代わって社会主義と国家主義（軍国主義）が台頭、土佐中教育にもさまざまな影を落とす。

学校要覧に見る土佐中教育

昭和五年の『土佐中學校要覧』は、創立の趣旨を成文化し、その教育方針・教育内容を明らかにした貴重な文献であり、三根校長による理想的な中等教育の実践をよくうかがい知ることができる。主要事項を順次見てみよう。

開校記念碑

最初に大正一二年一月に建てられた「開校記念の碑」をおいてあり、ここには北川が三根に語った建学の精神が大町桂月の名文によって表現され、さらに在校生の父兄が川崎・宇田二氏への功績を伝えるためにこの碑を建てたことを記し、子弟に対しては「国家に尽すは二氏の恩に報ずるなり」と説いてある。当時美文家で知られた文人・大町は明治二年高知市の生まれ、東京帝国大学文科大学で三根の一年先輩であった。三根は哲学科、大町は国文学科、さらに同時期に国史科に中城直正がおり、高知に単身着任した三根は、時折帰郷した大町や、高知県立図書館の初代館長だった中城と、旧交を温めている。

設立趣意書

その最初に大戦後とあるのは、第一次世界大戦を指す。「中学校令」によりながらも「進んで上級学校に向い、他日国家の翹望する人士の輩出を期する」とあり、国家待望の人材養成をうたっている。これは、「川崎宇田財団法人寄付行為」の第一条「国家有為の人材を養成するの目的」でも示されている。さらに、大正八年は中学校令の改正された年であり、その第一条が「中学校は実業に就かんと欲し、または高等の学校に入らんとするものに必要な教育をなす所とす」から、「中学校は男子に須要なる高等普通教育をなすことを目的とし、特に国民道德の養成に力むべきものとす」に変更された。『日比谷高校一〇〇年史』には、「儒教精神に依らず、自主性を持つ紳士をつくるという、当時のリベラリスト教育者」であった「川田の考えていた道德とはまったく異質であったに違いない」とある。

当時は人材と云えば国家有為の人材であり、国民道徳も強調されつつあったが、この趣意書では道徳には触れてない。

沿革概要

ここで注目すべきは、大正九年の開校と同時に、女性も含む三名の外国人を英語教授の嘱託として迎え、以後も年々補充し、ネイティブによる英語教育を導入したことである。まだ高知に英米人は少なく、布教に派遣されてきた牧師やその夫人にも依頼している。かつて井上清は、「英語の学力向上よりも、外国人にジカに接し、国際理解に役立った」と語ってくれた。日本の海外発展にそなえた人材育成策であった。第一次大戦後に世界経済の動向を見極めた行動で巨富を得た川崎・宇田両翁にとっても、我が意を得た思いであっただろう。この沿革からは、当初六〇万円であつた資金が、大正一〇年に逝去された川崎幾三郎の遺族から寄せられた一五万円、さらに校舎建築費不足金として川崎・宇田両家から追加支出された一〇万円を加え、合計八五万円となった経緯を読み取ることができる。

本校の特に留意せる点 これは、宇田伝では「五大方針の実行」、川崎伝では「土佐中の五大特色」として強調してある五項目だ。要約すれば、一、個人指導 二、天賦の能力發揮・自発的修養 三、堅忍剛毅・健実なる思想 四、責任 五、運動 であり、大正五年に全国中学校長会で発表した事項とも通じる。川崎伝では、一、二が天才教育の方針であり、土佐中の特色と述べてある。

本校の実際 「学年編成」では予科（小学）を一五名、本科（中学）を二五名、ただし本科五年は一定せずとある。

これは、多くの生徒が本科四年修了で旧制高校に進学したからで、五年生は希望高校に進めなかった者か、平井康三郎（保喜・五回）の東京音楽学校（現東京藝術大学）のように、志望校の受験資格が中学五年卒業の場合に限られていた。「教授」の最初にあげてるのは、「能力・学力に応じ教科書以外の教材を工夫、個人指導に努む」であるが、先生方は手作り教材を作成するほか、市販のルーブリーフ式問題を進度に応じて個人別宿題とするほか、作文や漢字の書写にもよく取り組ませている。そして国・漢の栗山謙先生は、「私は七時頃に登校する。それから始業までと、一二時から一時までと、三時以降とその間に生徒を指名して、その前で作文の批評や宿題の講釈を検するのが例になっている」（『三根先生追悼誌』）と述べている。数学の大野倉之助先生は、「問題集を自分で解け。分からない箇所だけ聞きに来い」で、まさに個人別・自学自習だったと、公文公（七回）は語ってくれた。三根校長のいう個人指導を、各教科の先生はそれぞれ工夫をこらして実践していた。

「教授」の二番目には、「各教室に辞書を豊富にそなえ、自学自習の習慣を養成す」で、国語・漢和・英和などの辞典が教室ごとにそなえてあり、自ら辞書で調べる態度を養った。三番目は、主要教科は四年の三学期で中学五年までの過程を修了し、高校受験に対応することであった。最後に、予科からの英語学習である。いずれも現在ようやく導入が本格化した事項を、百年近く前から始めており、教育者・三根の真骨頂が発揮されている。現在では、個人別自学自習も、英語習得・国際理解も、パソコンによる情報検索やオンラインの活用で、より充実した取組が可能である。

「体育」では、体操時間を規程より多くとり、また運動を奨励、体力向上に努めている。運動の際の裸体奨励や、黒ん坊大会の他、夏には浦戸湾で遠泳大会も開催している。校内には、武術場・雨天体操場・プールも設置された。一部の「頭だけの青瓢箪」に反論するためか、要覧末尾に「中学校生徒体格検査比較表」をのせ、県下および全国の中学より優れていることを示している。しかし体育は、健康な体力育成が中心で、他校との対抗競技はあまり好まなかった。細木志雄（一回生）は、「負けず嫌いな三根校長は、生徒数が少ないため強い選手が揃わず、勝てないので団体競技はきらった」と追悼誌で語っている。

「訓練」では、向陽会の名称で自治修養会を開き、風紀や校内整頓を生徒主導で行っている。毎年、創立者・故川崎幾三郎の墓を弔い、謝恩・報恩の念を固めている。

「授業料」は、県立と同額にしている。「給費生」の規程も設け、操行・学業優秀ながら学資なき者には、願いにより学費を給付すとある。

各種データ 末尾には、現在職員表から出身者動静調まで、各種名簿やデータが提示されている。このうち「昭和五年度学校経費調」では、五千五百円あまりの授業料収入に対し、基本財産からの収入（利子七％）が四万二千元で、六〇万円の基金が学校経営の最大の支えであったことがうかがえる。

なお『三根先生追悼誌』には、入学者選抜にあたって、三根校長が不自由な目にもかかわらず、時には地方まで出向

き、自ら面談・考査・人材発掘に務めていた様子がある。高岡郡日下小学校の戸梶金治郎（八回）は、来校した校長から「なぜ土佐中を受けるか」と聞かれ、暗算もやらされたと記している。また校長は生徒全員の性格や希望・家庭環境を熟知しており、平井康三郎（六回）の音楽学校志望に父が大反対で、学校に怒鳴り込んできたが逆に説得し、父は音楽ファンになったと、平井は述べてある。

昭和初期の社会状況と三根の苦闘

すでに大正四年には全国の中学校に「天皇の御真影下賜」があり、大正一四年には勅令によって「陸軍現役将校配属令」が定められ、中学校にも配属将校を配置することになった。第一次世界大戦後の金融恐慌と社会不安の中で、大正デモクラシーは急速に衰え、いっぽうで国家主義・軍国主義が強まるとともに、学生たちの中には社会主義・共産主義に走る人たちも現われた。土佐中もこれら社会情勢と無縁ではいられず、真摯に取り組もうとする三根を大いに悩ますことになった。その実例を『三根先生追悼誌』から紹介しよう。

まず、昭和初期の不況による卒業生の就職難であり、曾我部清澄（一回）は、「昭和五年就職難の時世に物理学など出て、そう楽々と口のあるはずがない。……ともかく先生の配慮で鹿児島に奉職することになった」と述べ、中澤薫

(四回)は、東大文学部を出て就職運動にかけずり回っていたころ、別の紹介で川田正徴をお訪ねすると、「貴下のごとは、三根さんから頼まれて知っています」とのお話で、ありがたかったと書いている。

芝純(七回)は、東京の校長ご自宅で奥様からうかがった話、「三根は(土佐中)出身者の就職の斡旋に、今夜は遅いからといっても、少しでも早い方がよいからと夜のうちに出かけられることもありましたが」を披露している。

教え子の思想問題での対応は、先生のご逝去を自由のない暗い生活(刑務所)で聞いたという下司順吉(六回)がこう述べている。「三谷君(七回)が東京大森のお宅へうかがうと、へわしを築地小劇場に連れて行ってくれ」といわれた。目の見えない先生がどうして芝居をと、不審に思いながらご案内した。耳で芝居を見ながら先生は、へ下司はこんな芝居から左傾したのだとつぶやいたそうだ。ぼくの思想の脱線を、ぼくの心情の低さまでおりて理解してくださるために……。都築宏明(六回)は、「社会主義が流行した頃、へマルクス全集その他適当な参考書をさがしてくれ」と手紙をいただいた。これも一派に偏しないで、ますます研鑽するご努力の一例」と述べている。土佐中卒業後の教え子の左傾化を心配、頭ごなしに否定するのではなく、まずその思想心情を理解しようと努めている。

ご逝去三、四日前に校長を訪ねた岩郷義雄(六回)は、政権を握ったばかりのヒットラーとナチズムの将来について、「へドイツは恐ろしい国だ。今に見ろヨーロッパを始め世界中ドイツに苦しめられる時がくるぞ」と予言された。今にして思えば先生はなんと鋭い洞察力を持たれたことだろう」と記している。

『創立五十周年記念誌』には、制服のことが出ている。森岡清三郎（一回）は座談会で「旧校舎時代は、制服がないので着物に袴^{はかま}で、いやでたまらなかった。制服が出来ることになり、ネクタイ折襟のものを中沢に着せた。これはよいと喜んでいたが、決められた制服はつめ襟で、霜降りであったので皆がっかりした。」とある。理由は、「小倉（つめ襟）が三円くらいで、背広が十五円で負担が大きいから」と、『三根先生追悼誌』の座談会で、山崎清三（一回）が語っている。学生服の袖に白い白線が付けられたのは、二代目の青木勘校長になってからで、前任校・愛知一中が軍服の階級章にならって付けていた袖章を導入したが、そのきっかけは校外の風紀巡察で他校生と見分けるためと、『向陽の空』第二号にある。

威厳ある風貌ながら、生徒には「おとう」と親しまれた三根は、昭和一〇年三月一日に突然倒れ逝去した。三根伝には「先生逝去の前夜、校長宅にて学校運営の事に関して客と対談し、平常に異ならず。客去つてにわかに脳溢血を發し、翌曉蓋然長逝せらる」とある。この客とはだれであったのか、訃報を聞き高知に駆けつけた長男三根徳治（歌手デイク・ミネ）は、後日その様子を「父は学校で（おはよう）と誰にも帽子をとって挨拶するのが常だった。死の前日のこと、軍部の将校（学校への配属将校）がこれを敬礼にせよと迫ったが、父は教育方針は変えぬと、言い通した。この出来事が引き金になって、父は脳溢血を起こしたのであろう」と、同窓会関東支部『筆山』に記している。卒業生の芝純も同窓会誌『向陽』三号に、『昭和一二年一夜配属将校と激論せられ、翌日脳溢血で殉職された』と書いている。

おわりに

川崎・宇田両翁と三根校長による高遠な理念で建学された母校であるが、創立当時の世論は必ずしも歓迎ばかりではなかった。開校直前の大正九年三月九日の『土陽新聞』には「中小生徒及び父兄諸君に告ぐ」で土佐中学を取上げ、こう論じていた。「聞くところによるとその理想ははなはだ高遠雄大にして、その効果従つて顕著なるが如きも、その果実を見ざるに於て世人をしてこれを信頼せしむること、恐らくは不可能ならん。∴絶愛の児孫を託せんとするの可否は絶対にこれを判別すべからず」。

このような状況下で、校長以下県下の優秀児を勧誘して独自の少数精鋭指導を行い、同年五月二七日の同新聞では早くも「漢字筆記成績 日本一の土佐中学 東京高師附属を一蹴す」と報道せざるを得ない実績を上げている。

その後も昭和一八年「追悼誌」刊行の直前には高知県議会で、土佐中の県立移管問題が検討されている。県立中学の入学難緩和と、多額の基本財産活用が目的だったようだが、幸い土佐中理事たちの反対で、立ち消えとなった。

草創期の苦難を乗り越えた母校は、第二次世界大戦の戦火で校舎を焼失しながらも、三代目の大嶋光次校長の卓越した手腕で、新制中高として蘇った。さらに四代目校長に初めて卒業生の曾我部清澄を迎え、建学の趣旨を生かしつつも

新しく教育方針「人格の完成と社会に貢献できる人材の育成」を掲げ、発展をとげてきた。

まもなく創立一〇〇周年も迫りつつあるが、ぜひこの「創立基本資料集」の原文をお読みいただき、創立者たちの熱き息吹に触れ、今後の躍進に役立てていただきたい。

二〇一三年一月七日 中城正堯（三十回生）記